

学びあい学び続ける教師集団文化の構築

-教科部会の活性化を通して-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
津田 智康

実習責任教員 前田 洋一
実習指導教員 芝山 明義

キーワード: 校内研修, 協働性, 教科部会

1 課題設定の理由

1) 実習校の概要

実習校は、三重県鈴鹿市内にある学級数 34 (特別支援 3 を含む)、生徒数 1073 名、教職員数 84 名の大規模中学校である。(平成 29 年度)

生徒の大部分は部活動に参加し、その部活動での指導もあり大きな声で挨拶ができています。

だが、基礎的な学力が身につけていない生徒や基本的な生活習慣が確立されていない生徒も多く、各学年で生徒指導上の問題を抱えている。

教員には、生徒の実情から日々の対処的な生徒指導に追われ多忙感がある。鳴門教育大学の教職員アンケートをみると、市内中学校と比較して、「授業の工夫、改善を組織的に行っている」の評価は低い。

2) 問題意識

筆者は、教員の一番の仕事は授業と考える。しかし、実習校の教員は対処的な生徒指導や成果として実感を得やすい部活動の指導に追われ、教科指導の準備に時間や労力をかけていない現実がある。その結果、講義中心の知識を伝達するだけの授業となり、授業での指導や準備の不備によって対処的な生徒指導を増やしていることに気づいていない教員も多いと推測される。

淵上 (2005) によると、「教師集団は、職務上の緊密な結びつきは弱く、むしろ教師個々人の自律性が保障されている。また、学級経営や教科指導に関しては、教師の専門的能力に基づい

た独自性が尊重されている反面、生徒指導場面においては、他教師と足並みを合わせようとする強固な同調性を持った集団である。」とある。

これらの実態から、いかに教科指導において教員同士が協働性を発揮し学びあう良さを実感できる集団を創り上げるかという課題がある。

2 実践方法

1) 実践に向けての考慮事項

問題意識で示した課題解決の方策はどのようにすればいいか。そのために、教科指導に関して、以下の点を考慮して実践することとした。

- ①既存の取組や組織の有効活用を考える。
- ②積極的な教員の取組に焦点をあて、その教員の自己効力感の向上を図ると共に、他の教員に刺激を与える。
- ③教科指導は、生徒指導ともつながるものだという意味づけを行い、教員に教科指導に対する必要感を持たせる。
- ④大規模校の強みである同教科の教員が複数いることの活用を考える。
- ⑤教員が協働してやらざるを得ない状況を作り出すことを考える。
- ⑥教科指導において、教員の協働した取組に焦点をあて、協働することの意味づけを行う。
- ⑦教科指導における教員間の対話を重視し、リーダーシップとフォロワーシップを育てる。

2) 実践計画

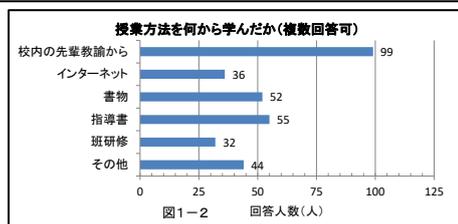
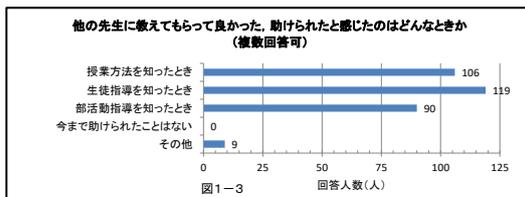
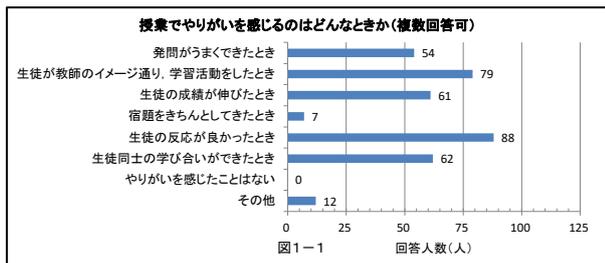
表 1 実践計画

期間	実践概要
3月 まで	市内各中学校教員への調査 2017年度の研修計画の検討 先行実践事例や先行研究の分析
4月 ～ 6月	教科部会の目的設定 教科部会における授業研究と実践 教員の協働性の構築
7月 8月	1学期の教科部会の取組について検討と修正 2学期公開授業の提案
9月 ～ 11月	修正内容を加えた授業研究の実践 公開授業へ向けての教科部会を活用した実践 取組に対して教員へのアンケート
12月	実践結果の分析、省察、まとめ

3 実践の実施

1) 市内中学校教員への調査と結果および考察

市内中学校の5教科担当の教員を中心に「授業でやりがいを感じるのはどんなときか」や「授業方法を、何から学んでいたか」、「他の先生に教えてもらって良かった、助けられたと感じたのはどんなときか」などについてアンケートとヒアリングを行った。



これらの結果から、教員は生徒の授業中の感じ方が教員に伝わることで、やりがいの実感を持つことがわかる。また、校内の同僚の影響を受けていることが分かる。さらに聞き取りから①最初に勤めた学校や地域の影響が大きいこと

②市内各中学校で授業を見せあう習慣が広まり学びあう風土ができつつあること③教員は一度身につけた学び方を変えられないことが分かった。教員間の協働性については、教員の困り感が強いときに感じることが多い。また、ある教員の課題を同僚で共有し、その課題解決に向けて手だてを共に考え、それが課題解決につながったとき協働性が上がることも聞き取りから分かった。

2) 教科部会の機能強化と週時間割への設定

大規模校であり同教科の教員が複数いるという強みを活かして教科部会の活用を考えた。そして校内研修の取組を教科部会に組み入れた。また、教員が集合しやすいように週時間割に教科部会を設定した。

表2 実習校の週時間割

	月	火	水	木	金
1限	理科部会		国際担当部会	英語部会	国語部会
2限	企画委員会	研修部会	数学部会	生徒指導部会	教育相談部会
3限		社会部会			
4限					
5限					
6限					

3) 教科部会の始動

昨年度までの教科部会は、年度初めに教科を運営するに当たっての打ち合わせが行われる程度のものであったが、本年度から5教科については毎週行われることになる。集まる時間を設定しても、その目的がなければ週時間割の教科部会も形骸化する。そこで以下の点を配慮して取組を行った。

①教員の負担感を減らす。②各教科部会の具体的な内容を提案し、メンバーで共通した取組を創りあげる。③校内研修の取組と合わせる。④教科部会の活動は、教科主任を中心にメンバーの自主性に任せる。

このように配慮したのは、今後も週時間割の教科部会を継続させるためである。さらに実習校の教員に教科部会の必要感を持たせることを考えたためである。

4) 通信 Collaboration の発行

以下の5つのことを考えて通信を発行した。

①教員の取組や他校の実践を紹介し、教員が学びあう機会をつくる。②研修に関わる教員の取組をクローズアップし、その取組を広げる。③教科部会や校内研修での各教員の考え方や意識に注目をあて、教員のさらなる取組の活力につなげる。④それぞれの取組を教員に紹介することを通して、その紹介した教員の自己効力感を高める。⑤鳴門教育大学との連携や研修部の取組、筆者の取組の目的を解説する。

5) 教科部会のメンバーの人間関係をつくる

教科部会の様子を観察していると、話が盛り上がる部会とそのようにならない部会があった。そこで、各教科部会内の教員間の理解を深め、少しでも心理的な壁を取り払うことを目的に教科グループ内の教員の良さを確かめ合う活動「それぞれの特徴は何か？」を行った。

6) 教科部会を研修の取組とつなげる

5月：研修の取組をつなげるため、教科部会で各教員が授業でどのような承認活動を行い、どのようなユニバーサルデザインを取り入れた授業をしているかをふり返ることをした。校内研修においては各教科グループ内で各教員の取組から共通して取り組めるものを話し合った。

また、教科部会でユニバーサルデザインについての疑問が出たため、それについての解説を筆者が行った。

6月：授業のない空き時間に各教員がお互いの授業を見あう活動（実習校ではプチ公開授業と呼ぶ）を行う前に、各教科部会で共通して取り組む重要ポイントを設定した。この目的は①5月の校内研修時に各教科グループで決定した取組を6月のプチ公開授業の重要ポイントとつなげる、②各教科部会で統一した重要ポイントを決めることを通して協働する取組をつくること

にあった。

7月：校内研修でプチ公開授業のふり返りを行った。

8月：実習校では2学期に1学年の公開授業を実施している（本年度は11/16）。昨年度までは、主に1学年の学年会で授業者を決定していた。本年度は、この取組を全教員のものとするため、以下のように提案した。

①公開授業のテーマを設定する。②各教科グループで授業者を決定する。③各教科グループで目標を決定する。④各教科グループ全員が関わり、1人1役の役割分担をする。⑤来年も使える手だて、教材を模索する。⑥公開授業までに、4回の検討会を実施する。

テーマとして、「授業発表は、授業者だけでなく教科グループの発表」「授業の経験は、授業者だけでなく教科グループの財産」「教師各個人が『自分は今回〇〇でチームのために頑張れた！』と胸を張れる研修に！」を設定し、公開授業の取組は、教科グループのメンバー全員で1つの作品を作るイメージであると説明した。

全教員が関わらざるを得ない状況をつくるため、教科グループのリーダーとして検討会を実施する企画調整担当、授業者、指導案作成者、教材準備をする者など各教員1役の分担を考えることとした。

9月～公開授業まで：企画調整担当が各検討会で進行しやすいように、何をして、どのように進めるとよいか分かるようなプリントを準備した。また、企画調整担当には、各検討会でメンバー全員に発言を促すよう依頼した。

検討会でメンバーが関わらざるを得ない状況をつくるために、共通となる話題を提供した。

具体的には、視点生徒について①名前を知っているか②どのような特徴があるか、長所は何

か③授業内容や教材のどの場面どのような手だてで、その生徒をどのように変えようとしているか、などを検討会ごとに企画調整担当からメンバーに確認することにした。

4 実践から得た成果と課題

1) 各教科部会の変化から得た成果と課題

公開授業後、2学期の公開授業までの各教員の取組についてアンケートと聞き取り調査をした。結果は表3-1, 3-2のようになった。

表3-1

項目	調査人数(人)	教科				
		国語	社会	数学	理科	英語
1 自分の教育活動に活かせる内容だった		7	7	8	8	7
2 自分に必要な知識、またはスキルを身につけることができた		3.6	3.6	3.9	3.9	3.8
3 今後の授業の取組の改善につながる		3.1	3.4	3.4	3.6	3.5
4 自分は教科グループに貢献できたと思う		3.4	3.6	3.9	3.9	3.7
5 他の先生方とつながりを創ることができた		3.0	2.4	3.4	3.4	3.7
		3.1	3.4	3.4	3.4	4.0
平均		3.3	3.3	3.6	3.6	3.9

表3-2

項目	調査人数(人)	教科			
		体育	技術	家庭	技能教科
1 自分の教育活動に活かせる内容だった		9	4	4	17
2 自分に必要な知識、またはスキルを身につけることができた		3.2	3.8	3.3	3.4
3 今後の授業の取組の改善につながる		2.9	3.5	3.3	3.2
4 自分は教科グループに貢献できたと思う		3.0	3.8	3.3	3.3
5 他の先生方とつながりを創ることができた		2.6	3.8	2.8	3.0
		2.8	3.8	3.3	3.3
平均		2.9	3.7	3.2	3.2

選択肢は4段階(4:そう思う, 3:どちらかといえばそう思う, 2:どちらかといえばそう思わない, 1:そう思わない)とした。

全体としては、3以上(どちらかといえばそう思う)の結果を得ることができ成果があったといえる。ただ、項目別で見ると、「自分は教科グループに貢献できたと思う」の数値が、他と比較してどの教科グループでも低く課題がある。

今後、各教科グループにおいて、各教員の貢献度につながるような役割分担を提案することが教員の協働性を高めることにつながる。

技能教科の教員の聞き取り調査から、5教科のように週時間割に教科部会があることの優位性が分かった。5教科の中では理科部会が4月からの観察を通して良い変化が大きく見られた。これは、公開授業の取組を通してメンバーの役割が明確になったことが大きいと推測する。

2) 実践全体を通して得た成果と課題

①成果：教科部会の時間を活用することで研修の中身を充実させることができた。さらに、ある教科部会で得た情報を別の教科部会に伝えたり通信を活用したりして、各教員の良い取組を広げ刺激することを考えた。これは、各教員の自己効力感を得ることもつながった。

教科グループ内の勇気づけのアクティビティを実施したことは教員間を和ませるきっかけとなり、状況に応じた実践であったと推測する。

すべての教員が関わらざるを得ない状況をつくることにおいて、公開授業へ向けて各教員に役割を決めたことも成果といえる。

教員が学びあい学び続けるという意味で教科指導をテーマに据え取組を行うことは有効であることが分かった。それは、検討会を観察する中で、他の仕事も配慮して時間を制限したにも関わらず、どの教員も教科指導の検討に取り組み出すと時間を忘れるくらい熱心に取り組む姿が見られたからである。ただ、そのためには各教科グループ内の教員間の心理的な壁を払拭しておくことが重要である。また、対話を活性化する話題の提供とリーダーシップやフォロワーシップを育てておくことが大切である。

②課題：他の教員の良さを取り入れることは少ない。なぜしないのか、など教員の感情を尊重しながら聞く必要がある。また、各教員間にはまだ心理的な壁がある。来年度も新たな教員が加わり、その教員との壁も少しずつ払拭していく必要があろう。そのために、教員が楽しめるような取組を考え壁の払拭に努めたい。

教員がチームとなる良さの実感をもち、協働性は高まったものの、教科指導に対する必要感はまだまだである。今後も、各教員の状況を観察し、その場に応じた取組を継続していきたい。